赤馬通信
第2号

渡邊崋山のこと

当研究所理事・下関市立大学学長　下山　房雄

その名を「蛮社の獄」の項目につなげるといった程度の受験勉強的知識しかなかった渡邊崋山について、私が興味を抱くようになったのは、1977年春、上野の国立博物館で一幅の山水画＝崋山「千山万水図」に出会ってからである。

縦148.3cm横71.2cmのその画の中景から遠景にまず私は目を注いだ。すると、左が陸で右が海だ。陸は幾重もの入江を挟み、諸処に霞の帯を纏った山々であり、その山々の列は海に大岩あるいは小岩を放つ。ある入江には小さな帆船が、別の入江には帆柱が何本もの異国船らしいものが、幾艘づつか浮かんでいる。目線を上にあげると、遠くにうっすらと富士山とも見える山が描かれている。波を立てて陸地と入り合う海を眺め、紙幅を右に越えてゆたったりと広がる大洋のイメージを脳裡に結びながら、目を下方に転じて近景に至るとアッと驚く。滝が落ちているのだ。その滝の落ちる先に集落があり、人々が歩いている。さらにその先に、つまり画面一番下に浜辺があって、そこにも船が複数浮かんでいるではないか。

果て無く広がっていくさまの大洋と想ったのは実は湖だった。近景の滝を確認したうえで、改めてこの絵全体を観ると、何かの危うさを秘めた独特の緊張感が画面に漲ってくる。この緊張感を得てから今日まで四半世紀、崋山は私にとって心に懸かる存在であった。

ところで「新かながわ」に対応する山口の民主的地方政治文化紙は「山口民報」である。この「山口民報」01年7月8日号の一面コラム「奇兵隊」は、「寝苦しい一夜、『渡邊崋山』（石川淳、筑摩書房）を読む。戦前、太平洋戦争前夜の作だが、時代に迎合しない書きっぷりがいい。」で始まる。小泉「経済改革」を水野「天保改革」になぞらえて「新しい時代を信じ、ひたすら真実を究めようとした崋山の精神は時代を超え重みを増してくる」と結ぶ随想であった。これに触発されて、この夏のヴァカンス20日間を過ごした海老名市の図書館を利用などして崋山関連の本を8冊ばかり精読あるいは斜め読みした。まず岩波文庫の『崋山・長英論集』（これは10年近くツン読状態だった）、それから岩波書店『石川淳選集12巻』（80年10月）、芳賀徹『渡邊崋山優しい旅びと』（朝日選書86年1月）などなど。「などなど」には、崋山の春画を論ずる怪しげな本や、児童書の偉人伝シリーズの一冊もある。これらの学習過程でなるほどと思ったり、エッと思ったり、いろいろ認識の世界が広がり有益だった。ここでは以下三点を記しておきたい。

まず「千山万水図」について。崋山は「真景」つまり写実を重んじた。観念で中国風の山水を描く「山水画」を「空疎」と難じている。そのなかで彼がたった一枚描いた山水が「千山万水図」なのだ。「図」中の款に「丁酉」（天保八＝1837年）とあり、ここから「四十五歳の作になる。二年後に「蛮社の獄」で逮捕され、やがて自刃するに至る最晩年にさきがけた作品」との解説もあるが（77年「日本の山水画展」カタログ）、国許＝渥美半島田原に謹慎蟄居中の作品殆どが製作日付を入獄（1839年5月）以前に溯って記されているとの定説を私は採りたい。そうすれば「千山万水図」は、単に「構想奇抜」で「凄い」との感に留まらず、中遠景に海洋国家日本の客観状況が描かれ、近景にはその状況を自覚せぬままに人々が生きている閉塞した日本の姿が描かれているとの断絶構造を持つとの私の解釈に現実味を与えるからだ。なお「千山万水図」は秋田の素封家の個人蔵で特別の展覧会でもなければ観ることはできないが、田原に行けば良くできたコピーが常時展示されているらしい。

風景・人物の「真景」的スケッチの入った崋山の旅行記が何点かある。神奈川関連では、1821年6月（崋山、数えで29歳）に戸塚で田原領主の弟を迎えて後、鎌倉、江の島を訪ねた『趨相日記』（挿画無し）および1832年9月に大山街道（矢倉沢往還）を厚木まで行った『游相日記』がある。1832年10月には妹の嫁入り先＝桐生に20日余り逗留する『毛武游記』が作られ、そこには私が国民学校5年から旧制桐中を経て新制高校2年までを過ごした桐生および近傍の地の雷電山、赤岩、大間々、葉鹿など懐かしい名が登場している。しかし、その桐生の地では私の少年のときも、その後、墓参や同窓会で訪れたおりにも、崋山のことは一切聞いたことがない。それに対し、現在の海老名市では崋山に因むものに出くわすことができる。まずSATYの専門店街に行けば「その名に恥じぬ銘菓」を自称する「崋山」が売られている。包装紙は崋山の「真景」画である。市内柏ケ谷の赤坂というところには、ここで崋山は大山街道を離れ、小園村、早川村（現綾瀬市）に向かったとの案内板が立っている。小園、早川には、三宅坂の田原藩江戸屋敷で育った幼少時の崋山を可愛がってくれ、後に藩主の手が付き一子（三宅友信）を生んで実家に戻された「お銀さま」の生家（早川）と婚家（小園）があったのである。古代から中世にかけての古東海道跡といわれるその側道を、崋山の170年後の私が猛暑の中、汗をダラダラ流し、坂を上下しながら自転車で辿った。凄まじい宅造で昔の面影は殆ど無いが、途中で「暑いのに頑張りますね」など見知らぬ人から二度も声をかけられるといった田舎らしい場面に入り込むことがあった。

最後に、石川淳「渡邊崋山」。これは凄かった。じわじわと陰謀を巡らせて崋山を追いつめていく鳥居耀蔵など幕政権力側、崋山逮捕後に身の危険を恐れず助命、赦免を必死に工作する先生や友人たち、逆に急に知らん振りを決めこむ旧知の人々、これらの人物像をくっきり浮かび上がらせるクールな叙述である。おそらく石川は、治安維持法弾圧下での様々な生き様を想起しつつ書いたのではないか。また「頭脳のたたかいではいつも白日の下、民衆の眼前でおこなはれる。もっとも蘭学者の看板を掲げた一群のうち、それに値しないものもゐることはゐたので、さういふものの稼ぎ場は強権とのうへによりほかになかった」といった学者評や、「これが日本だ」という日本＝最上級を示す寛政期江戸の市井の言葉を評して「これはほかのことについては薯の煮えたのも知らない評価」と書いている点など、1941年の石川の叙述が2001年の今日に持つ現実性はいやになってしまうほどである。

石川が1964年3月に書いた「筑摩書房版「渡邊崋山」後記」も面白かった。「シナのいくさは泥沼に落ち、やがて太平洋に事あろうとするまぎはにあたって、国内では学問芸術をぶっつぶすためのたくらみが図に乗っていた」当時「芸術の迫害者に対して、これを芸術家の典型として立てるのに崋山は戦術的に好都合とおもはれた」と彼は書いている。しかし彼は「崋山のひととなりに完全に感服しきってゐたわけではない」し「世界観からいって、もう一息といふ不満がないこともない」とも述べる。蘭学を通じて当時の世界情勢を把握し「万事議論、皆究理を専務」とする西洋人の特質を評価しながら、「不忠不孝渡邊登」の七字の遺書にみるように、藩主に忠義立てして自害するという儒学思想の枠組みで生涯を終わったことなどには、私もどうも納得しかねる。しかし、忠孝と勤倹の鑑から脱却せぬまま、幕政批判者として死に追い込まれるという矛盾的構図が却ってわれわれの心を打つということなのかもしれない。(01/08/13)